

論文初回提出を終えて 3・30 吉永英未

最初で最後のゼミ

日本の大学で必ずあるゼミは、中国の大学ではそうもないことを知った。ほかのゼミがどうなのかわからないため、はっきりとしたことは言えないが、私の指導教員の学生全員が、顔を合わせることは、一年時に同じ授業を受けていたときを除くと、二年時からいままで、一学期に一度しかなかった。

毎学期の終わり、指導教員の馮先生が自分の学生全員を招き、大学のレストランで一緒に食事をする、それが一学期、最初で最後の顔合わせである。もちろん、ゼミ生と約束して個人的に会うことはできるが、日本の大学のゼミのようなまとまりやその団結の暖かさはなかった。

論文提出を前に、今年から歴史学部には予備質疑応答制度が導入された。卒業前の論文の質疑応答のとは別に、初稿を提出する前に、指導教員を除く三人の先生の前で自分の論文について発表し、審査するのだ。そのため、私たち馮先生の学生は、2月28日に馮先生の研究室に集まった。

論文を見せ合って、あれはどう、これはどう、「これで大丈夫かな？」と言い合った。初めての、最初で最後のゼミといえるものだった。さみしくも、くやしきもあつたが、それ以上に一つの大切なことをやり遂げなければならないというプレッシャーに、感慨しているひまもないことを自分に言い聞かせた。

論文提出

ゼミのあった夜、馮先生は私の論文を一晩で見て、最初から最後まで添削を加えてくださった。またもや、感動して、言葉にならなかった。その翌日、提出する目標であったが、参考文献の書き方と史料の分け方に苦戦し、その日のうちに提出することはできなかった。そして3月30日、午後5時前、ついに論文を大学の教育システム上に提出した。

学内審査用と学外審査用の二種類の形式の論文と、論文の概要である。提出したあと、過去にオンラインで登録した基本情報の部分にまだ不安があり、いつもの教務課の陳先生を尋ねると、今度は強い口調で「ここに聞いてもわからない」と言われてしまった。

提出したその日、じつは私の気分は落ち込んでいた。3日間の奮闘で精神的にも身体的にも疲れ果てていたせいもあるが、一番は、わたしが焦りすぎて、そのせいで周りの方々に迷惑をかけてしまったからである。実は、私は論文の提出が3月30日までだと思っていたのだが、

実際のところ、最終締め切りは4月5日だということが提出する日にわかったのだ。以前、クラスメイトと顔を合わせるたびに提出期限を確認したが、みんな口を揃えて「うん。そうだよ」と答えるので、私もその気になってしまっていた。

周りの学生も初めての手続きのため、理解が十分でなかったのだと思う。私は人一倍焦り、ラストスパートを走りきったのだが、その「焦り」のために、馮先生、そして周りの方々にたくさんの負担をかけてしまったことを深く反省した。

思い出すと、ゼミの途中で私が「早く桜を見に行きたい」と言ったとき、馮先生に、「そんな時間なんてない」と一言で返されてしまったが、一晩で私の論文すべてに添削を加えてくださった翌日、私に、「論文の本文はもう問題ないから、今日は桜を見に行けるよ」と言ってくださった。

私の焦りを、自分しか見えていない「わがまま」を、周りの一人一人の方々は包容し、咎めることなく、ただ私に、前に進ませてくれた。一生懸命になりすぎて、目の前のことしか見えていなかった私は、そんな周りを見ることもできず、たくさんの人を巻き込み、大きな迷惑をかけてしまっていた。

3月30日